
図書室、僕と彼女

彼方 ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室、僕と彼女

【Nコード】

N4372P

【作者名】

彼方 ヒロ

【あらすじ】

僕は図書室に行くことが好きで、毎日のように通っていた。そんな中、図書委員の少女と二人きりでいる時間が多くなっていた。他小説サイト、ブログ、HPより転載

僕は、図書室が本当に気に入っている。

図書室の静謐な空気が、古びた本の匂いが、ごつごつした木の机の肌触りが心地良い。

図書室にいと、落ち着く。

いつまでも、そこにいたいと思うくらい。

僕の学校の図書室は、とくに大きいわけでも、たくさんの蔵書があるという訳でもないけれど、特有の落ち着いた雰囲気とその手の生徒には人気だった。

僕も今日の放課後、窓際の席に腰を下ろして、本を広げていた。そんな中、ふと思う。

この静けさが、本当に心地良い。

すぐそばの窓は開いていて、かすかな風が部屋に流れてくる。カーテンがひらひらと揺れ、その影が僕の広げた本に陰影を刻んだ。

僕はそうした小さな幸せを噛み締めながら、本に読みふけることが好きだ。

でも、図書室にいて心地良く思うのは、たぶん本の香りとか、静かな空気だとか、それだけが理由じゃない。

僕はそっと視線を上げる。彼女は、カウンターの前に腰を下ろし、分厚いハードカバーの本を広げていた。

左手で頬杖をついている。片側の長い髪の一房が机に垂れかかっていた。

形のよい眉。上品な唇。そして一番目を惹くのは、その目。何故だか、その瞳には深い感情が込められている気がした。

僕は彼女がどんな名前で、どんな声をしていて、どんな性格なのかもわかっていない。本当の赤の他人だ。

でも、これだけはわかる。

彼女がこの図書室が好きだということ。

そう、僕がこの図書室を気に入っているのは、彼女がいるからだ。決して、彼女に恋慕の感情を抱いているとか、そんなことではない。

ただ、彼女がそこにいるだけで、僕にとっての居心地のよい空気が出来上がっている訳で。

彼女と僕の二人っきりの、この浮世離れた空間を守っていきたいと思う。

……そろそろ帰る時間だ。

少し名残惜しいけれど、僕は本を片付けて、鞆を持って立ち上がる。

カウンターを通り過ぎる際に、ふと思ってしまふ。

たまには、声をかけてみようかな。

いや、でも。

なんて言えはいんだろ。突然話しかけたりして、居心地悪く思ったりしないかな。

そんなことを考えているうちに、僕はそんなことをつぶやいてしまふ。

「いつもご苦勞様」

すると、彼女が顔を上げた。

目が合う。

僕は思わず足を止めてしまった。

彼女の瞳に意識が吸い込まれそうになる。

僕が固まったまま、頭を真っ白にさせていると、彼女はふと微笑み、言った。

「どうも」

地底に響き渡るような低い声をしていた。

でも、思ったほどおとなしそうな印象は受けなかった。本をよく読んでいるからてつきりおとなしいのかと思っていたけれど、声はきはきしているし、そんなことはなさそうだ。

ようやく体の硬直が解けて、僕は軽く頭を下げると、何かに急ぎ

立てられるような心持で図書室を後にする。

扉を閉めた後、そこに背中を寄りかからせて、溜息を吐く。
慣れないことをするもんじゃないな。

でも、初めて彼女と話せた。また、話しかけてみようかな。

そんなことを思いながら、夕陽の光の差し込む廊下をぼんやりと歩いていく僕。

僕はいつもぼうつとしている性格で、でもとりあえず勉強だけはよくやっている。

その甲斐あって、授業中、ぼんやりしていてもめったなことでは先生に注意されずにやっていける。

それに、僕は自分でもよく気が利く方だと思っているので、親友と呼べるほどの友人はいないにしろ、周囲とはいい関係を築けていけると思う。そんな僕の性格を見越してか、先生も僕を積極的に頼ってくるのだ。

今日も、放課後、僕は先生から頼まれた用事を済ませて、自分の教室に向かって歩いていった。

鞆を置きっぱなしだったのだ。

この時間だと、もう図書室も開いていないから、まっすぐ帰るしかない。

廊下の窓を覗くと、既に日も暗く、なんだか薄ら寒い空気が漂っていた。

僕はこう見えて、怖がりなので、こんなシチュエーションはよしとくれと思う。

無意識に僕は般若心経を唱えながら、自然と急ぎ足で、次々と教室の前を通り過ぎていく。

まったく今日に限ってどうしてこんなに静かなんだろう。

どの教室にも生徒の姿はなかった。

やっとのことで曲がり角に差し掛かる。

よし、その階段を上ればすぐに教室！

そう思つてほつと胸を撫で下ろしかけた時、ふと視界の隅をその光景が過ぎつた。

その窓の中に、人影が見えた気がして、僕の胸は跳ね上がる。

僕は足を止めてしまう。

おいおいおいおい……今、人がいなかった？ でも、ここ……。

ちらりと視線を上げると、「生物準備室」の文字。こんな時間に人がいる訳がない。

でも、確かに見えた。

まさか、本当に……幽霊？

僕は般若心経を超早口でつぶやきながら、どうしても後ろ髪を引かれて、振り返ってしまう。

そして、見た。

薄暗い生物準備室の奥で、人影が二つ蠢いている。

何……やつてるの？

僕は目を見開いて、彼女と彼を見る。

一人は、教師だった。

僕もよく話すことがあった。二十代前半の若い男性教諭。

……なんで。

彼の後頭部の横から、ちらりと彼女の顔が見える。

図書室の、あの少女。

彼女はじつとその男性教諭を見つめながら、壁に背中をもたせかけている。

図書室での彼女の静謐なイメージが、今目にしているその光景に、塗りつぶされていく。

僕は一步、あとずさってしまう。

そつと男性教諭の手が彼女の肩に伸びる。

彼女の顔には表情は浮いていない。

触れられても、彼女は何も言わなかった。ただ、目の前の彼の顔をじつと見つめるだけ。

そつと彼女のタイが解かれる。

ボタンを外す彼の指。

僕の彼女に対する想いが、ずたずたに切り裂かれた。

僕は一步、一步と後ずさる。

彼らは、×××した。そして、×××する。

僕は廊下の壁に背中を打ち付ける。

こみ上げてきた嘔吐感に、僕は口を押さえる。その途端、僕は駆け出した。

なんで、彼女が。

自分がどれだけあの場所、あの時間に支えられていたかと思い知る。

もうあの心地良い時間は戻ってこないだろう。

ただ、このどうしようもない悲しさだけが胸に残っているだけだ。もう、やめてくれ。あんな場面、見たくない。

それでも、何度も目に浮かんできてしまう。なんておぞましいんだろう。本当に、人間なんだろうか。

家に帰ると、僕はベッドの中にもぐりこんで、枕に顔を埋めて、激しく息を切らす。

本当に僕は度胸のない人間だ。

たかが人間のやることじゃないか。なんでそんなに狼狽する必要がある？

でも。

僕には刺激が強すぎた。

僕はまだ女の子とそういう関係に陥ったことがない。大人になって、いずれかそういうことをしなくちゃいけないんだろうけど、僕にはそんなの全然考えられない。

結局僕はどうしようもなく臆病で、震えながらベッドでうつ伏せになり、いつの間にか浅い眠りに落ちていた。

朝になると、カーテンの隙間から入ってきた光が鼻先をくすぐる

ので、仕方なくベッドを出る。

まだ六時か。全然眠れなかった……。

台所では既に母親が朝食の仕度をしていた。彼女は「おはよう」と言いかけて、僕の顔を見てぎよっとした顔をする。

「どうしたの？」

僕は言葉を返さず、水を一杯飲むと、そのまま部屋に戻る。

制服に着替えて、またベッドにもぐりこんだ。

少しは楽になった気がする。もうあの光景が繰り返されても、特に胸が痛むことはない。

けど、ずっとあの少女の顔が頭にちらついて、仕方がなかった。

学校に行ってから、僕は友人の話をぼんやり聞いているだけで、窓の外を眺めたりしていた。

授業中は、もちろん頬杖をつきながら、目を閉じている。

そんな中、あの男性教諭に声をかけられたのは、トイレに向かって歩いていった時のことだった。

「島崎っ！」

突然背中を叩かれたので、僕は危うく転びそうになる。

僕がげぼげ咽だすと、橋本先生は「悪い悪いっ」とげらげら笑いながら、さらに背中を叩いてくる。

「気持ち悪いなら、保健室に行くか？」

「あんたのせいだよ！」

僕は思わず怒鳴ってしまっただけから、はっと我に返る。

橋本先生は唇を尖らせて、「そんな言い方することないじゃん」とつぶやく。

「島崎が、暴言を吐いた……っ」と

橋本先生は手帳を取り出して、メモを取り始める。

僕は涙目で「すみませんってば！」と叫ぶ。

「わかってくれたか」

「すみません。でも、橋本先生がすべて悪いです」

「言っねえ、君は」

橋本先生はからから笑いながら、手帳を胸ポケットに仕舞い、その瞬間、僕の顔を間近からのぞきこんでくる。

「お前、顔色悪いな。どうしたんだ？ 酒でも飲んだ？」

「飲みませんよ。ただ昨日は眠れなかっただけです」

僕はすぐ目の前にある彼の顔を直視できなくて、視線を逸らす。

この人は、昨日、あの部屋で、あの子とそういうことをやっていた人間だ。

でも、それでも彼の様子はいつもと変わらなかった。

どうして？ どうしてあんなことを平気でやってられるんだ？

「何じつと見てるんだよ。俺の顔、正面から見るとイルカみたいってよく言われる」

「いや、サメです」

「おお、サメか！ お前、俺が取って食うかと思ってるんだろ」

橋本先生が僕の手をつかもうとするので、僕は思わず「触るな！」と手を払ってしまう。

先生は目を丸くして、たじろぐ。

「何お前、俺がさつき糞して手を洗わなかったの、知ってるの？」

僕は何も答えずに唇を噛む。

昨日のことを聞いてみるべきなのだろうか。

いや、でも、そんなこと駄目だ。この人は、自分の体面を守る為に、どんなことをしてくるだろう。

「おいおい、島崎ホント、どうしちゃったのよ？」

先生は本当に心配そうな目つきで僕を見つめてくる。たまらずに、顔を背ける僕。

「なんでもありませんよ」

「先生になんでも言っていいいんだぞ？ な？ 俺ってば見かけ通り、頼りになるしね」

「そうやって……」

僕は思わずつぶやいてしまう。

「そうやって、たぶらかしたんですか？」

先生は「は？」と間拔けた声を出す。

「お前、もしかして俺がホモだとも思ってるの？ 男のケツに差し込む趣味はねえよ！」

すると、通りがかった女子に先生は頭を殴られる。

「あんた、ほんとに教師か、変態！」

すると、先生は頭を押さえながら、泣きべそをかいて縮こまる。

「なんなんだよ、どういつもこいつも俺に冷たく当たりやがって」

僕はもう何も言わずに、歩き出す。

また嘔吐感がこみ上げてきた。

もう、考えることはやめよう。

すべて忘れてしまえばいい。

そう思うのだけれど、どうしてもあの図書室を忘れなかった。

あの心地良い時間が恋しくて、でももうそれは戻ってこなくて、現実とのギャップに僕は自分の腕に爪を食い込ませるばかりだ。

僕は、結局何もできない臆病者だ。

授業が終わって、放課後になった後も、僕は机に突っ伏したまま、寝入っていたらしい。

起きると、もう四時だった。いくらなんでも、寝すぎだよ、僕。

ごそごそと机に置かれていた現代文の教科書とノートを片付けていたら、携帯に着信があった。

開くと、僕の寝顔の写真が送られてきている。ふざけんよ！

僕はさっさと画像を消去して、頭に刺してあった花飾りを放り投げ、教室を後にする。

しばらく歩いた後に、僕はふと気づく。

僕はどこに向かつてるんだ？

足が無意識のうちに動いて、図書室に行こうとしていた。

僕は溜息を吐いて、くると回れ右をする。

もうあそこには行かない。あの子の顔なんて、見たくないんだ。

それでも心が、あの三階の部屋へと向かってしまう。

なんだこれ。馬鹿じゃないのか。僕はそこまでの部屋に執心なのか？

僕は自然と早足になって、三年生の教室の並ぶ廊下を通る。

もう、早く帰って本を読んで寝よう。また他の図書館に行けばいいんだし。そうだよ。それがいい。

その時、偶然にもあの声が聞こえてきたので、僕の思考は停止する。

僕は立ち止まり、その教室を見た。

声はドア越しに聞こえてくる。

思わず一步を踏んでしまう。

やめろ、帰れ帰れ。何してるんだよ、お前の向かう方向はそこじゃないだろ？

それでも、ドアに歩み寄ってしまう。

その少女は、数人の女子に囲まれていた。髪を引っ張られてる。何これ、いじめ？

「私はすべてやるべきことはやったわ。あなたが投げ出したんじゃない」

少女のあの声が、耳に響くたびに、僕の心のどこからか悲鳴が聞こえてくる。

やめろ。もうその声は聞きたくない。聞きたくないのに。

「はあッ！？ あんたにこれもやっというてって言ったはずでしょう？」

「それは頼まれていないわ。だからやらなかっただけ」

「あんたねえ！」

仕舞いには、数人の女子が彼女につかみかかろうとした。

「やめろ」

突然の声にぎよっとする。その声がどこから漏れてきたのかと推察して、自分の口から出てきていることに気付いて、愕然とした。

しかも僕はすでにドアを開き、教室に飛び込んでいる。

少女を取り囲んだ女子数人は、「何よ、いきなり」と僕を睨みつけてくる。

僕は自分でも何のためにこんなことをしたのか、わからなかった。ただ、彼女の髪があんなに軋むほど引っ張られてるのを見たら、なんだか胸がざわざわして。

ああ、何してるんだ、僕は。

そう思いつつも、僕の足は独りでに動き、彼女らの前に立つ。そして、少女に向かって「行きましょう」とつぶやいていた。

僕は自分の行動力に驚く。こんなことするような度胸、僕にあったんだ。

少女は、驚いたように僕を見つめていたが、やがてくすりと笑って、立ち上がる。

「ちょっと待てよ、どこ行くんだよ」

彼女達がつかもうとするその腕を僕は振り払っていた。

「僕はこの人に用事があるんです」

「はあっ！？　なんであなたにんなこと言われる必要があるんだよ！」

「黙ってるこの天パ！」

天パ言うな！　もろに心に響いただろ！

僕は半泣きのまま、少女の腕を引いて、歩き出す。

背後から女子達の舌打ちが聞こえたけれど、もう僕は完全にそれを無視して、気付いたら彼女の腕を引いて駆け出していた。

もうどこを走ったのか、わからない。

たくさんの曲がり角を曲がって、ようやく「はいストップ」と少女の声が聞こえて、胸倉を掴まれて足を止めた。

振り向いて彼女を見ると、彼女は可笑しそうに笑っていた。

「どこまで走る気だったの？」

どこまで走る気だったんだろう。なんだか頭が混乱していて、自分でも何をやってるのかわからなくなっていた。

「女の子を助け出して、その後、どうするつもりだったの？」

僕は壁に手をついて、息を切らせながら、「別にそういうわけじゃない」と弁解する。

なんなんだよ、この子は。どうしてこんなに走って、息一つ乱してないんだ？

「君、面白い！」

突然少女が手を叩いて言う。

「君って、いつも図書室にいて、私に熱い眼差し向けてきた子だよね？」

「向けてない！」

僕は思わず叫んでしまった。その顔を見て、彼女は再び爆笑する。「でも、やっぱり私のこと知ってたんだ。それで、助けてくれたの？」

「別に助けたわけじゃっ」

すると、彼女は首を傾げてしまう。

「助けたのじゃないんなら、何が目的？」

僕だってわからない。気付けば、その言葉を口にしていたんだ。

すると、彼女は「やっぱり私を連れ出して、人気のないところに

……」と言い出すので、再び「違う！」と叫んでしまった。

彼女はくすくす笑っていたけれど、ふと「ありがとう」とハンカチを差し出してくる。

「何これ？」

「だから、使つてよ」

少女はそつとハンカチを僕の額に当てる。

ちよつと待て、近い近い近い。少女の顔がすぐ間近にある。

その瞬間、ふわりとなんだか柑橘系の甘い香りがした。

僕は瞬きもせず、彼女の顔を凝視してしまう。

「ほら、やっぱり私に気があるんじゃない」

「あんた、わざとやってるだろ！」

すると、少女はようやくハンカチを離して、身を引いた。そして、穏やかに微笑みながら「さっきのあれはね」と言う。

「いじめだろ」

「まあ、そうとも言うかな」

そうとしか言えないだろ、とは何故か言う気にはなれない。

彼女は壁に背中をもたせかけると、片足をふらふらさせながら言う。

「あの子達、よく私に頼みごとしてくるの。私も暇だし、それに付き合っただけなのよ」

「それって、パシリなんじゃ……」

すると、彼女はちらりと視線を上げて笑う。

「そうとも言う」

沈黙が僕達の間而降りて、春の生暖かな風が窓から流れ込んでくる。

それはちょうどあの図書室で感じられる風の温かさに似ていて。

どうしてか、僕は心から安心してすることに気付いた。

こんな状況なのに。

「つらくないの？」

僕がおそろおそろ聞くと、少女は顎に人差し指を当てて、「んー」と唸る。

「そんなにつらくないかな」

「いや、つらいでしょ。だって、いじめなんだから？」

「私、そういう悪意とかに疎いから。人と接する中で感じる喜びとか、悲しみとか、私には感じられないの」

そう言った彼女の顔が、本当に悲しそうで、それは僕が初めて見る彼女の表情だった。

なんて寂しげな顔をするんだろう。

「だから、私は別の方法で喜びを手に入れようとしてる」

「別の方法って？」

僕が言うと、彼女は悪戯っぽい視線を僕に向けて、「それは言えないなー」とわざとらしく言う。

「別に言っただけでもないけど」

「嘘だあー。ほんと私のことかなり気になってるくせに」

「あのね！　なんでそういう話になるの？」

「私が君のこと、気にかけていたからだよ」

その言葉に、僕は体を硬直させていた。

君のこと、気にかけていた。

全然僕のことなんて知らないと思っていた。顔なんて覚えていないと思っていた。

「じゃ、またね」

歩き出す彼女に僕は「ちょっと！」と声をかけてしまう。

「何？」

彼女は振り向いて、抑揚のない声で言う。

「えと、あの」

あれ？　何を言おうとしたんだろう。勝手に呼び止めてしまったというか……。

僕がまごついていると、彼女はくすりと微笑む。

「またいつでも図書室に来てね」

その言葉は雷鳴のように僕の体を頭のとっぺんから足先まで突き抜ける。

そんな言葉を言うなんて、本当にずるい。

なんで今になって、そんなこと……。

「ねえ」

僕は俯きながら、言葉を必死に探って聞く。

「何？」

「付き合っている人はいるの？」

すると、彼女はその途端、一気に噴きだした。

「な、なんだよ……」

「やっぱり、私に気があるんだっ」

「だから、そうじゃなくて！」

いい加減しつこいよ！

「いないよ」

彼女は目の縁に涙を溜めながら、振り向く。

「私には、そんな人いない。生まれてから、一度だって、その人を見つけたことはない」

僕は自分で聞いたという、返す言葉もなく、彼女のその寂しげな表情を見つめる。

「じゃあね」

今度こそ彼女はもう振り返らなかった。

春の花の香りが漂う廊下を、彼女は掻き消えてしまいそうなかすかな存在感を漂わせて、ゆっくりと歩いていく。

僕には彼女にかけられる言葉も、彼女に向ける想いも既にごちゃごちゃになっていて、判別のしようがなかった。

一体彼女がどんな名前をしているのかさえ、未だに知らない僕は、彼女のなんなんだろう。

友人？ ただの通りすがりの人？ それとも――。

結局その日は図書室には寄らずに、家に帰ってきてしまった。

あの後に、また図書室で彼女と鉢合わせするのなんだか気恥ずかしい。

彼女と会った時、予想外に変人みたいで、僕は驚いた。

彼女は一体どんなことを考えているのだろう。

夏目漱石の「こころ」を読みながら、僕は頭の片隅で彼女のことを考えていた。

明日、また図書室に行ってみようかな、とふと思う。

今日はあのことを聞けなかった。聞けるわけじゃないが。

でも、僕の心から、彼女に対する負のイメージは完全に抜け落ちていた。

きっと彼女が、その目で、その言葉で僕が持っていた印象を塗り替えたからだ。

なんて、僕は単純な奴なんだろう。

今日あの廊下での言葉を言われたことが、そんなに嬉しかった

のか。

気付けば、彼女のことばかり考えてる。

僕は気づけば、本を閉じて、目の前にあの図書室の情景を思い浮かべている。

翌日家を早くに出てから、学校での時間を終始ぼうつとして過ごした僕は、放課後になると、どこか緊張した面持ちで図書室に向かった。

校舎の三階の廊下には、涼しげな春風が漂っていた。

図書室の扉にそつと手をかける。

声はしない。今日はあまり人はいないのかな。

そつと開いてみる。

確かにこの時、僕は彼女がいることを期待していた。

カウンターで居眠りしている一人の女子生徒に目が留まる。

彼女じゃなかった。

僕は何故かそこで足元を見下ろして、深い深い息を吐いてしまう。もしかして僕、がっかりしてるのか？

彼女とまた会ったら何を話す気だったんだろう。本当にどうかしてる。

僕は引き返そうとして、そこでふと思い返して、図書室に入った。後ろ手に扉を閉じる。

すると、カウンターにいた女子生徒がその音で目を覚ました。

こちらを見つめてくる。

「いらつしやい」

微塵も愛嬌を感じさせない声で彼女はそう言つと、すぐに興味を失つたように机に突つ伏してしまう。

僕の足が動き出した。

気付けば、カウンターの前に近寄っていた。

「すみません」

すると、女子生徒は「ん？」と眠たげな声を上げて顔を上げる。

明らかに面倒臭げな顔をして、こちらを見つめてくる。

「毎日図書室に来てる、あの係りの人、今日は休みですか？」

おい、何聞いているんだ、僕は。

すると、女子生徒は明らかに嫌そうな顔で見つめてくる。

「そうだけど。……何？」

「彼女と仲がいいんですか？」

すると女子生徒は「仲がいい？」と素っ頓狂な声を上げる。

「あいつと私が？ やめてよね！」

僕は彼女の言葉に含まれる嫌悪の感情に、眉をびくりと震わせる。やっぱり嫌われてるんだな。

それでも、聞いてしまう。

「彼女、クラスの中では、どんな様子なんですか？」

「あんた、何？ 春日に気でもあるの？」

僕は黙って首を振る。

「意味わかんねー。気がないなら、どうしてそんなこと聞く？」

「同志、だからです」

言ってみて、自分の言葉に驚く。同志？ なんだよ、それ。妄想は大概にしろよ。

すると、女子生徒はきよとした顔をして、その途端、大声で笑い出す。

「同志！ 同志ね！ あんた、頭悪いんじゃないの？」

僕は黙って俯く。

すると、肩を震わせて笑っていた彼女はふと笑いを止めて、言う。

「あいつ、いつも図書委員の子に係を押し付けられてるんだよ。今日は休んでるから、私が代わってやったの。私って偉いでしょ？」
僕はとりあえずうなずいておく。

「あいつ、はつきり言って、どうも好きになれないのよね。いつも笑ってるし、誰に対しても大胆な態度で振舞うしさあ。とっつきにくいつていうか」

そこで女子生徒は僕をちらりと見て、言う。

「あんだ、さつきから顔色悪いよ。大丈夫？」

僕は自分の頬をさする。そんなこと言われるとは思わなかった。

「なんか目とかに隈できてるし。お茶ごちそうしてあげるから、こっちに来て」

「いえ、あの」

「さつさと来んかい！」

僕は悲鳴じみた声を上げて、慌ててカウンターの後ろに回る。

すると、女子生徒は隣の椅子を叩いて示す。

僕がこわごわと座ると、彼女は水筒のコップになみなみと紅茶を注ぐ。

「はい。飲みなさい。ぐびっといって。ぐびっと」

いや、熱い紅茶ですよ？ 無理です。

僕が口を付けると、彼女はよしとわずく。

「あんだ、もつとしゃきつとしなさいよ？ 春日落とすんなら、もつと行動力があつた方がいいわ」

僕は紅茶を嘔き出してしまふ。

もろに紅茶を顔に受けた女子生徒はアチチチ！ と飛び上がる。

「すみません！」

「まあ、私も変なこと言つて悪かったよ。まあ頑張りな」

そう言つて、肩を叩いてくるので、僕はとりあえずうなずいておく。

一体なんなんだ、この人……。どうしてこんなに馴れ馴れしいの？

散々ティータイムに付き合わされてから、図書室を出る。

どうして、こんな目に遭わなくちゃいけないんだらう。

僕は結局彼女目当てに図書室に来たのか。

これじゃまるでストーリーカーじゃないか。

夕陽の照りつけるざらざらした砂利道を、僕はとぼとぼと歩く。

結局僕は何がしたいんだらう。彼女ともっとお近づきになりたいとか、そんなところ？

違う。そうじゃない。

僕はきつと、蜂が甘い蜜の香りに誘われるように、きつと彼女の残り香を求めて漂っているんだ。

図書室のあの空気は、一種の中毒を引き起こすものなのかもしれない。

そこで、何故か橋本先生の顔が浮かんでくる。

彼女の顔と彼の顔を並べてみて、僕はどうも胸がざわざわするのを感じた。

橋本先生は、彼女のこと、どう思ってるんだろう。

本当に愛してるのか？ あの人、女にだらしなさそうだしなあ。

でも、悪い人ではない。もしかしたら、本当に春日さんを愛して密接な関係が続けているのか？

どうして、僕はこんなことを気にしているんだ。

本当に僕はどうしてしまったんだろう。こんなことばかり考えて、頭が狂ったのかな。

その夜は結局考えすぎて眠れずに、翌日に学校に行ってから、僕はぼんやりとしていた。

なんだか頭が霞がかっているようで、足元もふらつく。

すると、またしても「島崎！」と耳元で声がして、僕は廊下の中程で足を止める。

「お前、なんだよその顔は。サキユバスに精力吸われたか？」

橋本先生は、僕の正面に回って下から顔をのぞきこんでくる。

うわ、この人煙草臭い。それに、少し酒の匂いも混じっているよな。

「何とか言え！　もしかして女に耳搔きされて鼓膜破られたのか！？」

突然先生は僕の耳に指を突っ込んでぐりぐりかき回すので、僕は悲鳴を上げる。

「お前の膜を突き破ってやるぜ！　初めては痛いぞおー！」

すると、救いの手が差し伸べられた。

「またしても先生は通りすがりの女子生徒に頭をひっぱたかれて、きやう！」と不穏な声を上げて、僕の耳から指を抜く。

「島崎君をいじめるのもいい加減にしなさいよ！ 彼、困ってるでしよ！」

「わーったよ。島崎、こいつお前に気があるらしいぞ？」

「ち、違う！ 何言ってるの、馬鹿！ もう知らない！」

女子生徒は顔を真っ赤にして、鼻息荒く歩いていってしまふ。

僕は耳をさすりながら、半泣きの状態で先生を睨む。

「ごめんってば。俺も、お前とじゃれあいたくてさー」

僕は溜息を吐くと、彼の腕をつかむ。

「ちよつとこつちに来てください」

「おおよ？ 珍しく俺に用があるのか？ 何かの相談？」

「そのようなものです」

「もしかして、初めてリードする時はどうすればいいのかとか、そんなところかしらん？ うへへ」

僕は先生を曲がり角まで連れてくると、正面から見据える。

今、僕は何をしようとしているんだろう。

自分が正気とは思えない。でも、どうしても確かめたいんだ。

彼女の為に？ じゃなければ、何の為だよ。

僕は短く吸うと、その言葉をつぶやきかける。

「先生は——」

「ちよつと待て！」

先生の手が僕の口に当てられる。

「お前、それは恋愛がらみの話か？」

僕は暴れるのをやめて、うなづく。

すると、先生の顔つきが変わる。

「わかった。本気でぶつかってこい！」

先生はフンツ！ と気合を入れて僕と向き合う。

「先生は、春日さんのことを愛していますか？」

その途端視界がぐるりと回った気がした。

息が詰まる。背中に痛みが走って、頭がジンジンと痛む。

肩をつかまれて、壁に叩きつけられたのだと知ったのは、ようやく視界が明瞭になって、先生の怒り狂った顔を前にした時だ。

「お前、どこでそれを――」

僕は目を見開き、彼を食い入るように見つめる。

なんて、なんて顔をするんだろう。

「おい！ 聞いているだろうが！」

もう一度背中を打ち付けられる。

僕は激しく咽た。

「お前、それを誰かに言ったのか！？」

僕が何かを言おうとする前に、先生は僕の首をつかんで締め付ける。
る。

僕は必死に何か言葉を吐こうとする。でも、苦しくて苦しくて、か細い息が零れるだけ。

僕はそっと先生の腕をつかみ、爪を立てた。

強く強く肌に食い込ませ、やめてくれ、と心の中で訴える。

視界がだんだん白く掻き消えてきた。

そこで、ようやく首から手が解かれる。

僕は壁に背中を擦りながら地面に滑り落ちた。

先生は驚いた顔で、自分の手の平と僕の顔を見つめている。

「げほっ、がはっ！」

僕が咽ると、先生は慌てて屈みこみ、僕の肩をつかむ。

「おい、大丈夫か？」

「先生、肩が痛い」

それでも僕の肩には彼の指が食い込んだまま。

「お前」

先生の声が震えている。

「お前、どこでそれを知った」

彼の血走った目が目の前にある。僕は息を切らしながら、「放課

後の生物準備室で、」と言う。

「見たのか？」

猛獣の唸り声のような彼の声に、僕はうなずく。

「そうか……」

彼は身を引く。ようやく肩から手が離される。

僕は地面に崩れ落ちたまま、彼を見つめる。

「春日さん、を、愛して、いるんですか？」

すると、先生の唇が吊り上がる。

「愛しているとも。愛しているさ。だから、島崎、誰にも言つな」

先生は僕の胸倉をつかんで、立ち上がらせる。

「絶対に言つなよ？ 春日を思ふなら、絶対に言つな」

「本当に愛してるんですね？」

「ああ、心から愛してる」

僕は「わかりました」と息を切らせながらうなずく。

すると、ようやく先生が元の笑顔を取り戻す。

「なんだ、お前もそういうのに興味あるんじゃないか！ てっきり

玉なしかと思つてたぜ！」

先生はけらけら笑いながら、僕の背中を叩く。

僕はずっと先生の横顔を見つめていた。

まだ疑問が心の中に沈殿していたからだ。

この人は、本当に彼女を愛しているのだろうか。本当に？ 本当に？

先生は「もうすぐ授業が始まるぜっ」と言いながら僕の背中を押して歩き出す。

「くれぐれも、言つなよ」

先生がじつと僕の顔を突き刺すように見つめてくる。

僕はうなずいた。

言つわけがない。

それが彼女の想いを裏切る行為なのならば、僕は絶対に言つたりしない。

「それでこそ、俺の島崎だ」

先生はそう言いながら、僕の肩に手を回してくる。

先生は授業中、僕に何度も視線を送ってきた。

たぶん心配なんだろう。

自分の保身の為？

それとも、彼女の身を気遣ってるから？

本当のところはどうなんだろう。

それでも、僕と先生との間には、明らかな溝ができたように感じる。

もうたぶん、僕と彼の間横たわる感情は、怒りと、敵意だけしかないのかもしれない。

僕だって今、怒っているのだ。

たぶんそれは、彼女の為に何にもしていないから。

なら、僕は彼女の為に何をする事ができる？

同志、春日のために――。

放課後になって、僕は重たいその頭で図書室を目指す。

校内の空気は冷え冷えとしていて、背筋が妙にぞくぞくする。

図書室が見えてきた辺りで、僕は立ち止まってしまう。

行かない方がいいんじゃないのか？

だって、これ以上踏み込んだら、今までの関係が壊れるかもしれないんだぞ？

それでも、行くのか？

すると、僕の足は勝手に動き出す。

図書室の扉に手をかける。そつとそれを横に引く。

古びた蔵書の匂いが鼻を掠めて、僕はカウンターをまっすぐに見る。

彼女が、いた。

彼女は僕を見ると、白い頬を綻ばせて、僕に手を振ってくる。

僕はカウンターにゆっくりと近づくと、彼女を見下ろす。

彼女はその大粒の瞳で僕を見上げてくる。

穏やかな瞳。

「君と橋本先生のこと、知ってるんだ」

突然の僕の言葉に、彼女は目を見開く。

その唇が震えた。

彼女は持っていたハードカバーの本のページを歪ませて、短く息を吐く。

彼女はかすかに笑った。

「愛してないわよ。だって私、誰も愛せないから」

誰も愛せない。それが、君の答え？

「あなた、それを知っていたのね」

彼女は僕を警戒するでもなく、憤りを見せるでもなく、ただ穏やかな瞳で見つめてくる。

僕はうなずいた。そして、言う。

「なら、どうして付き合っているの」

彼女はあの部屋で××した。××だった。なのに、愛していませんと言ったのか？

「私が彼と付き合ったのは、愛を感じたかったから」

「彼に愛してほしかったの？」

「彼にじゃない」

春日さんはそう言って、自分のお腹に手を当てて、愛しそうに撫でる。

「やがて現れる私の救い主に、よ」

僕は指を伸ばす。そっと彼女のお腹に触れる。

小さな脈動を感じた。

いや、それはただの錯覚だったのかもしれない。

でも、確かに僕は、彼女の体内に、命の鼓動を感じた。

どうして。どうして……。

「私は彼の精子だけが必要としていたの。彼を必要としていたわけ

じゃない」

「どうして、そんなこと……」

僕の喉はからからに乾いていて、本当にかすかな声しか出てこなかった。

すると、春日さんは慈愛に満ちた眼差しを僕に向ける。

「子供だけは、私を無条件に愛してくれる。私の喜びはそこから生まれる」

だから、彼に抱かれたのか。ただ命を自分の体内に灯したかったために。

「もう私のお腹には赤ちゃんがいるの。先生は用済みね」

用済み……それだけの為に先生を？

「だって、向こうから私に近づいてきたんだもの」

春日さんはそう言っ、お腹を撫でる仕草をする。

「一人で、育てるつもりなの？」

「そうよ」

馬鹿じゃないのか。そんなこと、本当にできる覚悟があるのか？

「覚悟なら、ある」

彼女の目は強い光を放っている。

「産んだからには、絶対に育てる。一人でも私なら、やっていける」

それが、君の答え？

僕はカウンターに手について、自分の手の平を見つめる。

僕は一体、何を考えていたんだろう。

図書室がどうだとか、そんな小さなことばかり考えて、結局二人の関係に口挟むだけで何もしていない。

一体僕は何を求めていたんだろう。何のために彼女に近づいたんだ？

「あなたがどうしてそんな顔する必要あるの？」

気付けば、間近に春日さんの顔がある。

「私のことなんか、関係ないのに。まだ会って数回言葉を交わしただけなのに」

自分でもわからない。どうして、僕は今、こんなに悲しんでいるんだろう。

それでも、僕は聞く。

「彼とは、別れるの？」

「もう別れた」

その言葉に、僕は顔を勢い良く上げる。彼女の肩をつかんでしまふ。

「どうしてっ！　せつかく出会ったのに、なんで！」

「だから、いいと言っているでしょう」

彼女はそつと僕の胸を押して、僕を突き放す。

「あなたには関係ないことなんだから。あなたはこの図書室で、ずっと静かな時間を過ごしていればいいの。……さつさと席について本を広げて。そしてこの空気に身を任せて」

彼女はそう言って、再び本を広げ、読み始める。片手でお腹を擦りながら。

僕はもう何もかもがわからなくなって、ふらつきながら、いつもの席につく。

本を広げる。でも、読むことができない。

いつものような心地良さはもう感じられない。

あの空気はどこにいったのだろう。あの空気の温かみを感じたいのに。

でも、僕の心はごちゃごちゃに入り乱れていて、もう風に身を任せることはできなかった。

どのくらい僕はそこでぼうつとしてたんだろう。突然春日さんが「もう店じまいよ」と言った。僕は黙って立ち上がる。彼女の顔は見えないようにした。

かける言葉が見つからない。彼女と僕の間には、もはやどんなに言葉を交わしても埋められない大きな溝がある。

彼女はきつと、自分の子供だけを見て、これから生きていくんだ

ろっ。

なんて自分勝手に、そして幸せな奴なんだろう。僕がどう思うかなんか、まるで考えていない。

そう、僕なんて、彼女にとっては本当に赤の他人でしかないんだ。彼女の前を通り過ぎると、僕は無言で部屋を出る。

そこに、何かひとつでも言葉が返ってくるものだと思っていた。でも、返ってこなかった。

それでも、どうしても期待してしまう自分がいたんだ。

なんで僕はたかが図書室で、たかが一人の少女に、こんなに心を揺れ動かせているんだろう。

まだ僕は彼女が追ってくることを期待してる。

そんなことあるわけないのに。

結局僕は、何がしたいんだよ。このどうしようもない哀しみは何？

家に帰ると、僕は再び夏目漱石の「こころ」を読み出す。先生の重苦しい発言が、僕の今の心理状況をさらにどん底に落としかける。なんでこんなに考えがまとまらないんだ？ もう心がばらばらに切り離されたみたいになってる。

僕が求めているものはなんなんだろう。どうして彼女のことがこんなに気になる？

訳が分からない。

もうあの時間は戻ってこなくていいから、どうか彼女のあの心を変えてほしいと思う。

けれど、どうしてそうしてほしいのかも僕にはわかっていない。

僕は布団をかぶって、歯軋りするしかない。

翌日、僕は学校に行き、授業を受けながらも、ずっと早く三限目にならないかと黒板をちらちら見るばかり。

橋本先生にどうしても頼まないといけないことがある。

何のためにこんなことをしてるのか、もうわからないけれど、行

動せずにはいられない。

ようやく三限目がきて、橋本先生が授業を始める。

彼は僕を見ようとしめない。

僕は彼の背中に刃物を突き立ててやりたくて仕方がなかった。

授業が終わると、僕は彼の元へまっすぐ向かって、「先生」とつぶやく。

その途端に彼は歩き出す。

「先生」

それでも、振り返らない。

彼が廊下に消えていくのを見て、僕はその瞬間、頭が沸騰するのを感じた。

僕は気づけば、彼に近づいて、胸倉をつかんでいた。

「彼女を見捨てる気ですか？」

「……あのなあ。何言ってるの？」

先生は肩をすくめてみせる。

「お前の言っている意味がわからない」

そうか。こいつはすべてをなしにしたがってるのか。

「お願いです。彼女を見捨てないであげてください」

「だから、何言ってるかわからないって」

先生は僕の手を乱暴に振り解くと、歩き出す。

僕はもう何も言わなかった。

言っただってどうせ駄目だから。それなら、僕は別の選択をするしかない。

でも。彼女はそれを受け入れてくれるだろうか。

本当に何をやってるんだろう、僕は。間違いなく頭がおかしくなってる。

会ってまだ間もない子に、僕は今、何をしようとしている？

僕をここまで揺り動かすものはなんなんだよ。

わからなくて、答えが見つからなくて、うんざりする。

その後、もう僕は燃料が切れかかったロボットみたいにぼんやりと時間を過ごすことになった。

誰かが何かを言った気がするけれど、もう覚えていない。

気付けば一人きりの教室で僕は頼杖をついて、窓の外の夕陽を眺めていて、本当に自分は何をやってるんだろうと思うと、笑えてくる。

本当にあれを彼女に言うのか？ 馬鹿じゃないのか。そんなの、だつてまだ僕は高校生だぞ？

でも、どうせ僕は彼女を前にした時、それを言ってしまうだろう。だつたら、もう開き直つたらどうだろう。

そう考えてみたら、突然胸の痞えが取れた。

僕は教室を出て、走り始めていた。

走馬灯のようにこの数日間の出来事が頭を駆け巡っていく。

理屈では考えられない、理由の分からない本当に深い気持ちがある。僕はそれに体に乗っ取られてしまったみたいだ。

でも、もう迷わない。彼女にそれを伝えよう。

途中、僕は思い切り転んでしまった。鼻をもろにぶつけたので、血が垂れてくる。でも、それを拭うこともせず、僕はすぐに駆け始める。

図書室の扉が見えてくる。

僕はどうしようもなく馬鹿で、臆病で、潔癖症で、だけどそれでも本当に大切なものが何かを知っている。それだけが、僕が僕を信じられるたった一つの長所なんだ。だから――。

僕は扉を開く。

彼女が振り向く。

その途端、彼女の顔には様々な感情が過ぎった。

戸惑い、哀しみ、あきらめ、そして、かすかな喜び。

図書室に入ると、僕はまっすぐに彼女の元に向かう。

彼女の大きな瞳が瞬きもせず僕顔をまっすぐ見つめてくる。

「どうしたの。そんな鼻血垂らして、息を切らせて。本当に、今の

あなたは間抜けな顔をしてるわよ？」

僕はカウンターに手をついて、身を乗り出す。

彼女はじつと僕を見据えたまま、肩を震わせた。

「君の隣の席は空いてるんだよね？」

「なにを……言ってるの？」

彼女は困惑の眼差しを向けてくる。

「子供が生まれた時、君一人だけしかいなくて、その隣に誰もいなかったら、きつと子供は哀しむ。それは絶対だ」

彼女は唇を引き結び、拳を握る。

「だから、僕がその子の父親代わりになる」

すると、彼女は本当に驚いた顔をした。

そりゃ驚くだろう。僕だって自分が何を言ってるのか、わからない。

でも、それでも言わなくちゃ気が収まらない。

「僕がその子の父親代わりになる」

「どうして……あなたにそこまでしてもらう必要は、」

「僕だってそう思う。でも、そうしたいんだ。そうさせてほしい…

…」

すると、彼女の潤んだ瞳が彷徨って最後に再び僕の顔に行き着く。

「本当に父親になりたいの？」

僕はうなずく。

すると、彼女は弱弱しく笑った。

「なら、いいわ。あなたがこの子の……父親よ」

その言葉を聞いた瞬間、ようやく僕の頭から血が抜けていき、加熱した脳みそが正常の働きを取り戻す。

「ようするに君は、私が好きで好きでしょうがないから、私の隣にいさせてほしいって言いたいんでしょ？」

彼女の悪戯っぽい笑み。

「いや、それは、」

おい。ここにきて、何で言葉を濁らせているんだよ。

僕はそれでも顔を真つ赤にして俯いてしまっただけで、彼女がしつこく顔をのぞきこんでくるので、逃げるようにいつもの席に向かった。

椅子に座ると、まっすぐに彼女の視線が僕の顔を縫いとめてくる。やがて二人の視線は離れて、再び静寂が本に取り囲まれたその空間を浸し始める。

僕は心地良さを、ようやく取り戻したと感じた。

結局僕は彼女が好きだったのか。あれだけ否定しておいて。

でも、今は本当に嬉しい。

嬉しくて嬉しくて、何度も彼女の俯いた顔を見つめてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4372p/>

図書室、僕と彼女

2011年11月15日16時34分発行